

オスロ会議報告

クラスター爆弾禁止条約調印 - 新たな歴史の始まり

小雪舞うオスロ。12月3日の日の出は8時32分。9時になってもまだ薄暗い中にたたずむ歴史的な建造物であるオスロ市庁舎に人々が続々と入っていく。ここ、ノーベル平和賞の授賞式が開かれることで有名な場所で、いよいよクラスター爆弾禁止条約の調印式が開かれた。CMCに集ったのは250人。日本からはJCBLと世界宗教者会議が参加した。

調印式は、各国の署名に先立ち、ノルウェーのストルテンブルグ首相やストーレ外務大臣、国際赤十字委員会、クラスター兵器連合（CMC）共同代表のトーマス・ナッシュさんがこれまでを振り返って、この条約の意義とこれから署名をする国々に感謝の意を伝えた。続いて、4月に来日して日本政府の条約参加を訴えたブラニスラブ・カペタノビッチさんが、「私はクラスター爆弾によって手足を失ったが、この禁止条約のために働くことで生きる意味を再び与えられた。明日12月4日は私の誕生日だ。素晴らしいプレゼントをありがとう。」と語ると、会場の拍手がしばらく鳴りやまなかった。加えて彼は、「条約が実行されて、本当に被害がなくなることを見ていかなければならない。そのために必要な支援が十分に集まるように願っている」と述べて、この調印式が終わりではなく、新たな始まりであることを強調した。彼のスピーチに会場はスタンディング・オベーションで応えた。

条約の署名は、オスロ・プロセスを立ち上げたノルウェーが最初に行い、ノルウェーと一緒にこれまでをリードしてきた国々による署名がステージ上で続いた。ザンビアが署名をすると、CMCのザンビアキャンペナーたちは国旗を振って、メキシコの署名のときにはラテンアメリカのキャンペナーたちが歓声をあげてそれぞれの政府を称えた。署名と同時に批准を済ませたノルウェー、アイルランド、バチカン、シエラレオネの4カ国に対しては、いっそう大きな拍手がわきあがった。

日本政府の署名は、メイン会場の二階にある別室で、中曽根弘文外務大臣によって行われ、JCBLから目加田、清水、内海がその様子を同室で見届けた。その直後、カペタノビッチさんと外務大臣が話す機会が少し与えられ、彼からも日本の署名にお礼を伝えることができた。署名に先立つ大臣のスピーチでは、日本として今後、支援を積極的に実施すると述べた。日本が新たに重要な役割を担っていくよう大いに期待している。

ほとんどの国がスピーチで、ノルウェー外務省、署名国と一緒に「CMCをはじめとする市民社会」に謝辞を述べた。この謝辞は世界中でクラスター爆弾禁止のために活動した市民一人ひとりの関わりに対するものである。CMCと一緒に、そして国内では会員、協力者の方々と一緒にこのキャンペーンを続けることができ本当によかった。前日のCMCのミーティングで、「とにかく明日は、歴史的なイベントをまず楽しもう！」と言い合っていた通り、楽しく、またこれまでの様々なシーンを思い出し、感慨深いときであった。この思いをみんなと共有したいと強く思う。